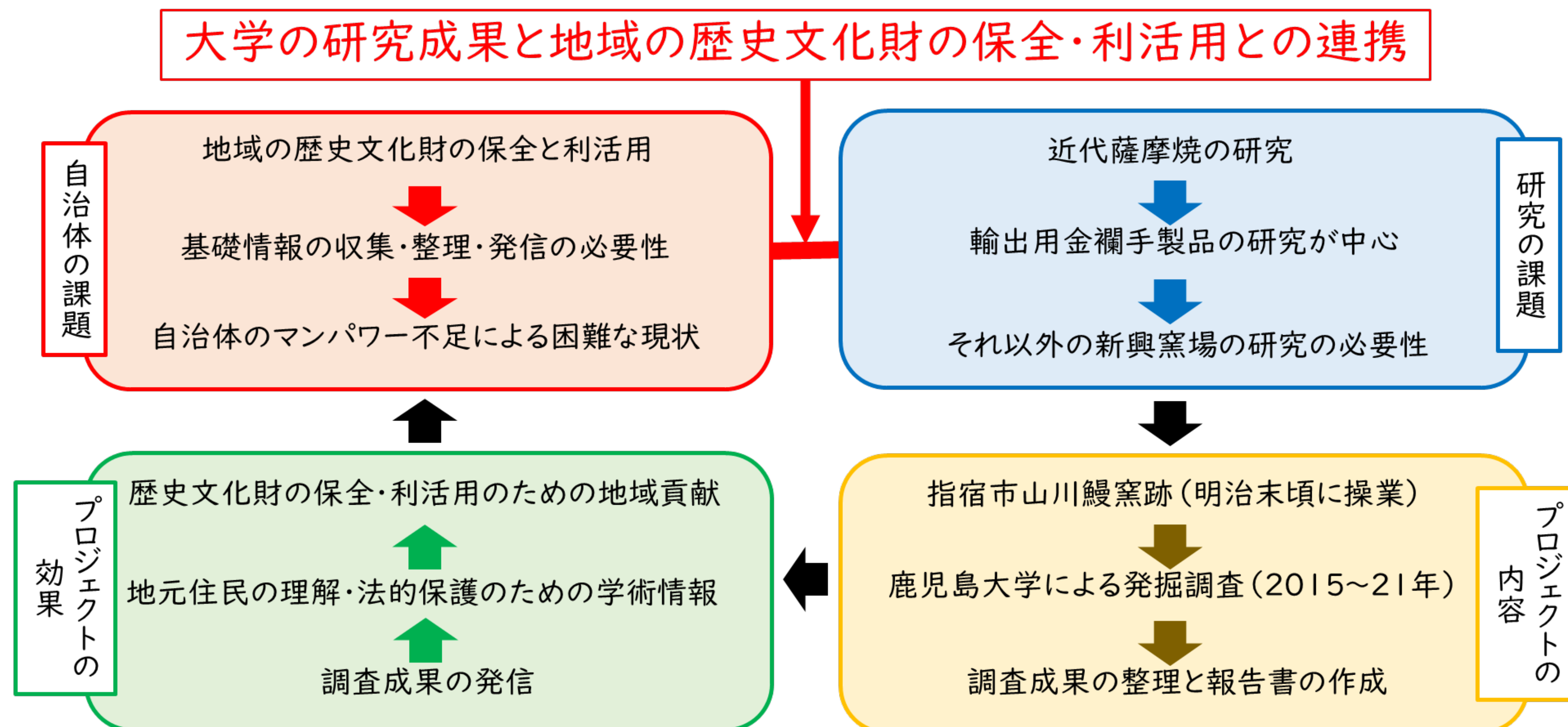


近代鹿児島における在地窯業の考古学的研究

渡辺芳郎（人文学科多元地域文化コース）

プロジェクトの目的: 大学の研究成果と地域の歴史文化財の保全・利活用との連携



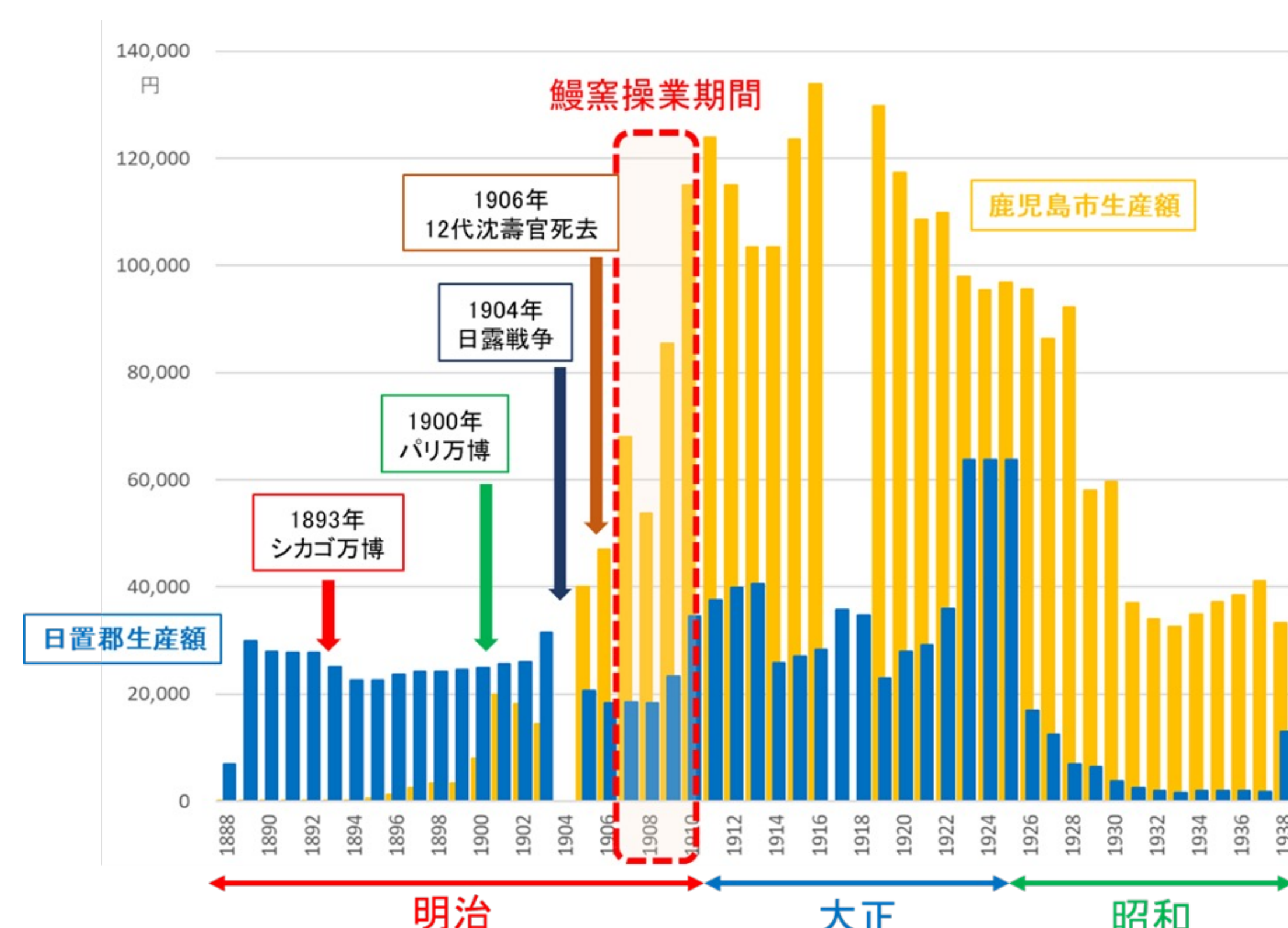
プロジェクトの内容: 2015～2021年に、指宿市教育委員会の協力を得て実施した人文学科考古学ゼミによる発掘調査の報告書作成を進めるとともに、鰻窯とほぼ同時代に開窯した野間焼窯跡の調査を実施し、両者を比較することで、近代鹿児島における窯業生産の実態を明らかにする。

鰻窯跡: 指宿市山川鰻に所在する窯跡で、燃烧室+3焼成室よりなる連房式登窯である（全長6.63m）。明治末年に苗代川（日置市美山）から移住した「伊集院どん」夫婦が操業したと伝えられ、発掘調査の結果、窯構造・遺物からも支持された。



野間焼窯跡: 種子島中種子町に所在する窯跡で、燃烧室+4焼成室よりなる連房式登窯である（全長8.6m）。明治40年頃に苗代川の中馬友吉父子が開窯した。窯構造や周辺に散布する遺物から、鰻窯跡との共通性が認められる。

明治時代末の苗代川の状況: 苗代川の陶磁器生産額は、鹿児島市内のそれに凌駕され、相対的に減少する。また求心力を持っていた沈壽官が死去する（明治39年）。この低迷を背景に、鰻窯も野間焼も「新天地」を求めて開窯された窯と推測される。



鹿児島市と日置郡（苗代川）の陶磁器生産額の推移（1888-1938年）